

光明山寺を中心とした南都浄土教の展開

Focusing on Kōmyōsen-ji(光明山寺)extension of
the Pure Land Buddhism in Nara.

坂上雅翁*

Masao SAKAGAMI

抄録

光明山寺¹を中心とした南都浄土教についてみると、覚樹、実範、永観をはじめ、光明山寺から高野山に移り、のちに法然に帰依した明遍や、高野山往生院に移り、のちに京都禅林寺の十二世となった静遍の存在はよく知られている。本論では、まず東大寺東南院三論系の念仏別所としての光明山寺の性格を、最近の研究成果を元に再検証する。さらに、高野山を始め、醍醐寺、禅林寺との関係、および大阪一心寺蔵「一行一筆阿弥陀経」や『高野山往生伝』をとおして、中世の南都仏教界における光明山寺を中心とした南都浄土教の展開をみていく。

1. 光明山寺に関する先行研究と、最近の調査結果

光明山寺の位置する山城国の寺院造営は、北山城では秦氏の北野廃寺、南山城では伯氏の高麗寺など、渡来系氏族の氏寺を中心として始まったといわれる。平安時代に入ると、山岳信仰の寺院が造立され始め、光明山寺にほど近い神童寺や金胎寺、神奈備寺などの山岳寺院もこの時代の造立である。

光明山寺のすぐ南で、木津川は東に大きく蛇行する。このあたりが泉木津で、都が平安京に移っても、奈良とくに東大寺を始めとする南都の諸大寺にとって重要な外港であった。

東大寺の別所として知られる光明山寺についての研究は、角田文衛「廃光明山寺の研究—蟹満寺釈迦如来像の傍証的論考—」(『考古学論叢』1, 考古学研究会, 1936)に始まる。角田は光明山寺跡を調査し、木津川沿いで光明山寺の所在した字光明仙から続く、天神川の下流に位置する蟹満寺の本尊釈迦如来像がかつて光明山寺の本尊ではなかったかという仮説を展開した。さらにそこに止住した僧に注目したのは、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』(山川出版社, 1975)である。井上は、光明山寺が東大寺東南院の三論宗の僧を中心として発展し、三論宗系南都浄土教の念仏道場の性格が強かったこと

* 関西国際大学教育学部

を指摘し、井上の研究はその後の光明山寺研究の指標となった。この井上の研究を承けて、和多昭夫は「高野山における鎌倉仏教」(『日本仏教学会年報』34, 1975)で、高野山における浄土教信仰の流れを9世紀末からととらえ、11世紀初頭にいたる高野山浄土教を、南都系および真言・三論・浄土が混在する醍醐寺系の影響が強かったとした。

八田達夫は「平安時代における山間部の寺院と浄土信仰—南山城地方の寺に対する一視点として—」(『国史学研究』14, 1988), 「山岳寺院の寺地について—南山城・光明山寺の事例を中心に—」(『国史学研究』20, 1994)において、光明山寺の創設者と寺域、周辺寺院について論究した。畠山聡は「中世東大寺の別所と経営—山城国光明山寺を中心に—」(『鎌倉遺文研究』1, 『鎌倉時代の政治と経済』(東京堂出版, 1999)において、光明山寺の寺域の境と周囲の状況を明らかにし、東大寺との本末関係と寺院経営について論じている。

光明山寺の位置する京都府南山城は、古代から開けた場所で古墳も多い。1989年11月から2003年3月にわたり、農免農道整備事業の一環として埋蔵文化財調査が実施された。光明山寺の参道に重なる車谷古墳群は、小字車谷の狭い尾根に密集した総数40基を越す南山城最大の群集墳であり、その調査結果が「光明山寺跡」(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第28集, 京都府山城町教育委員会, 2001), 「車谷古墳群(附. 光明山寺跡関連遺跡)」(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第31集, 同上, 2003)として報告されている。

「車谷古墳群(附. 光明山寺跡関連遺跡)」には、光明山寺の参道の一部が発掘調査の結果、発見されたことが次のように報告されている。

かつて、京都と南都を結ぶ奈良街道には、光明山寺に入る鳥居があったという。その地はまさに『平家物語』が詠う宇治橋の合戦に敗れた以仁王が非業の死を遂げた地でもあった。この鳥居を透して続く参道は、現在の野田川沿いに平地を抜けて車谷古墳群中の尾根道に続く。険しい尾根道を辿ると、右手に天神川が開析した車谷、左手に底知れぬ地獄谷が冷気を吹き上げる。そして、1号墳裾の国見観音堂からは、晴れた日に遠く京都市街を望むことができる。

車谷古墳群調査の副産物として、光明山寺参道跡の一部を検出した。古墳群中を通る尾根道は、かつて東大寺の別所として栄えた光明山寺の参道を基本的に踏襲している。戦後の筍栽培による地形の改変は著しいが、かつて石灯籠が累々と連なっていたと伝える信仰の道の一端を垣間見ることができた。川原石を敷き詰めた参道脇からは、鍛冶炉片や瓦片も出土しており、ここは信仰の道であると同時に物資の運搬や生活の道でもあった。古墳石室内からも中世土器が出土しており、参道脇に開口した石室が信仰の祠となっていた様子も想像できる。

平成14年度山城町内遺跡発掘調査事業の一環として実施した綺田渋川遺跡の試掘調査では、光明山寺「門口の川」が訛って地元で「モグチ川・モチ川」と呼ばれる野田川に面して、中世の灯籠や供養塔跡の可能性をもつ方形土壇を検出した。土壇内からは、青磁碗や常滑壺の他に多量の土師器皿や瓦器碗が出土している。渋川遺跡以外にも、参道や山中の修業の場、祠、水場等多くの関連遺構が存在する。かつて広大な寺地をもって栄えた光明山寺の遺構は、山中・平野部を問わず随所に散在する可能性をもつ。これらについても、光明山寺関連遺跡として今

後留意せねばならない点である。

この報告書によれば、従来、東大寺の念仏別所、隠遁僧の遁世地としての面が強調されてきた光明山寺が、参道を完備し多くの参詣者が訪れる寺院であり、平安京から南都（平城京）へ向かう人々、木津川の水運を利用した人々が東大寺へ向かう途次立ち寄った場所でもあったとみることができよう。

光明山寺の変遷について、円智の『円光大師行状画図翼賛』51²には次のように伝えている。

【光明山】拾芥抄ニ云。山城ノ国ノ別所ト一書ニ云。相楽郡ノ内井出之東南ニ在リ。明神ノ社アリ。元ト真言宗ナリ。今寺ハ絶テ村ノ名ト為スト云々。父老相伝テ云ク。此ノ山綺村ノ領内ニシテ在家ヨリ東ニ当テ玉水ノ南ナリ。堂宇等ノ建立ハ弘法大師在世ノ比ト申伝ケレト。巨細ヲハ今ハ知人モナシ。又寺内ノ別院都テ百二十坊アリトハイヘト当時ハ只野草ノミ生茂リテ一字モ存セルハナシ。マタ廢亡ノ時サヘイツノ比ト云事モ語リツタヘス。本堂ノ本尊ハ薬師ナリケルカ今ハ宇治田原ニオハシテ小堂ニ安シ申セルトカヤ。按スルニ此ノ東大寺ト事ヲ通シテ三論ヲ本宗トセリト聞ユ。サレハ永観律師ハ初メ東大寺ニ住シ中比ココニ移リ後ニ禅林寺ニ終リ給ヘリ帝王編年記。東大寺ノ重誉又此ニ住セリ浄土源流章。皆三論ノ明德ニシテ事明遍ノ行実ニ同シ釈書ニ云中川ノ実範此ニ終ルト云々。サレハ顕密兼学ノ地ナルヘケレハ弘法大師ノ御ナト申伝ルモ謂アルニヤ。治承ノ比高倉ノ宮ハ平等院ヲ落サセ給テ男山八幡大菩薩ヲ伏拝ミ新野池モ過サセ給テ井出ノ渡ヨリ光明山ヘカカラセ給ニ鳥居ノ前ニテ流矢ノ御ソバ腹ニ立ニケレハ馬ヨリニ落サセ給フ東鏡一盛衰記十五ナトアリ。

円智によれば、すでに江戸期には廃寺となっていたことが知られるが、東大寺、興福寺の史料によれば、東大寺末→興福寺末→笠置寺末→廃寺、という変遷をたどった。とくに、四至（領地の境界）争いはかなり激しかったようである。

また、南都浄土教が発展していく上での、光明山寺のはたした役割も見逃すことはできない。東大寺の念仏別所として発展したこの寺は、山城の棚倉村の奥にあり、最盛期にはかなりの数の堂宇をもつ大規模な別所であったことが知られるが、上記史料にあるように、江戸時代にはすでに廃寺となった。現在ではほとんどが竹林となり、松の大木と礎石のみが往時を偲ばせるのみである。土地の古老の話によれば、ここを流れる天神川の改修の際に、多くの焼けた木片が出土したとのことであった。この寺は密教と念仏の法灯を伝え、そこに名を連ねる者をも、永観・重誉・実範・明遍などが知られ、地理的にみても東大寺と醍醐寺の中間に位置し、浄土教に傾倒していった珍海も当然立寄ったであろうことは容易に想像がつくが、残念ながら記録の上にはまったくその跡がみられない。

2. 『高野山往生伝』と光明山寺

南都仏教と真言密教は密接な関係にあり、こと浄土教に関しては表裏一体であると言っても過言ではないであろう。もちろん密教とひと口で言っても、そこには高野山を中心とした東密、比叡山を中心とした台密という二大潮流があるわけであり、叡山浄土教が台密の流れの中で発展したとすれば、南都浄土教は東密の流れとともに発展したといえよう。とくに、南都仏教において真言密教は基礎学として学ばれていた。

光明山寺を中心とした南都浄土教の展開

南都浄土教において称えられていた念仏は、密教的名号観を持ったものであり³覚鑿が真言密教の阿字観における「阿」を、「阿弥陀」の阿とした影響を受けたものと見られるが、本稿では紙数の関係でこれには触れない。ただ、光明山寺から禅林寺（永観堂）へ移った静遍ゆかりの重要文化財「聖衆来迎図」の左上、日輪のなかには阿字が描かれていることを指摘しておきたい。

次の一覧は、『高野山往生伝』⁴に取り上げられている人物である。

教懐		増延
清原正国		暹与
信明		聖誉
無名		頼西
維範		澄慧
蓮待		明暹
明寂		定仁
経得		正直
蓮意		宗賢
迎西		西念
良禅		心蓮
行意		濟俊
※教尋		嚴実
琳賢		能願
能仁		尋禅
※定嚴		※心覚
兼海		浄心
澄賢		禅恵
円長		証印

(※印 筆者)

十三

宝生房教尋。俗姓平氏。元住園城寺。改移高野山。平生之間。行業不退。広学八宗。早究五部。以文殊為本尊。行灌頂。伝衆流。然間神心背例。終焉迎期。永治元年三月二十日申刻。三尺文殊忽以影現。告上人云。却後三日。至于寅刻。与一万菩薩俱来。可引接金色世界者。

于時上人合掌頌曰。唯願妙吉祥。為我現金身。不捨本誓願。即作開導師。其後還本土。昔法照禪師之逢生身。告往生於西方浄土之月。今教尋上人之感影現。約引接於金色世界之雲。文殊応化。古今相同者歟。同二十三日夜。及寅刻。忽發異香。人起信心。爰上人示弟子等云。汝誦提婆一品。唱文殊真言。上人即結同密印。如入禅定。忽然即世。入滅以後。一日端座。身体不動。手印如元云云。仏嚴房聖心者。当山伝法院学頭也。談義之間。近日住山。師弟之好。知委曲之人也。仍予相尋之処。記録如斯。

この教尋の伝からは二つのことが読み取れる。一つは高野山と文殊信仰の関係であり、今ひとつは『十念極楽易往集』の著者仏巖について触れていることである。これら二点についてはすでに論究したことがある⁵ので、詳細は略すが、南都浄土教において念仏する根拠となった、中国五台山における文殊菩薩から法照への念仏付属が、『大聖竹林寺記』を通して高野山においても広まっていたことがわかる。

『大聖竹林寺記』は、唐の法照が文殊菩薩の靈跡として知られる五台山において自らが感得した靈異奇瑞を記したものである。法照自身の手になるものか、その弟子たちが法照に仮託して記したかは明らかではないが、広く流布していたことがうかがわれる。

我が国にも早くから将来され、円仁が承和一四年（八四七）に撰した『入唐新求聖教目録』にある『五台山大聖竹林寺釈法照得見台山境界記』一卷はこれを指すとみられる。法然門下の長西による『浄土依憑經論章疏目録』いわゆる「長西録」には『大聖竹林寺記』の名がみえる。南都仏教においても『大聖竹林寺記』に見られる、法照が五台山竹林寺において末代の衆生の修するべき行として西方極楽浄土の阿弥陀仏を念ずることを付属されたということが念仏を称える根拠とされた。

三十五

宰相阿闍梨心覚。園城寺住僧。参議平実親卿息也。列智証門弟。学天台教觀。不樂綱維之崇（宗）班。只以菩提為望。二十五年住光明山。其後出彼山住当寺。逢阿闍梨兼意。究三部深旨。諸尊秘宝法。両界曼灌頂。三時行業。朝暮礼懺。在生之間不休息。爰養和二年四月之比。臥病床知不可愈。雖然日課不退。先知死期。至六月二十四日。起立端座。結印誦明。奄然滅。

心覚は25年間光明山寺に住したのち、興福寺小田原別所（浄瑠璃寺）から高野山へ入寺している。

3. 一心寺蔵「一行一筆阿弥陀経」 光明山寺分

この「一行一筆阿弥陀経」は大阪天王寺近くの一心寺に所蔵されるもので、文治5年（1189）の奥書を持つものである。『仏説阿弥陀経』を136行に分け、それぞれ結縁した僧侶が一行ずつ書写したものである。その中に光明山寺分として署名が48行（48名）分あり、以下がその僧名である。

明遍		朝舜
玄理		宗真
実印		観秀
実仙		慧修
源暁		宗鑿
信暁		巖増
運暁		観円
良真		印西

光明山寺を中心とした南都浄土教の展開

明恵		定心
証塵		宗俊
淳実		為慶
淳暁		聖俊
印満		淳恵
良恵		朝海
蓮生		林慶
良範		行兼
空恵		林円
運智		嚴運
慶真		恵敏
※定嚴		西実
証玄		珍助
信修		琳海
成真		静敏
円真		無為

(※印 筆者)

ここには明遍をはじめとする、光明山寺を代表する僧の名が認められ、とくに『高野山往生伝』と共通するものとして定嚴があげられる。ただ、『高野山往生伝』が藤原資長（のちに出家し如寂となる。1119～1195）により1184年に編纂されているが、定嚴の没年が仁平二年（1153）であることが知られるので、さらに検討が必要と考えられる。

結論にかえて

光明山寺の本寺である東大寺東南院は、東大寺南大門の東、現在の本坊や東大寺図書館の辺りに、延喜4年（904）東大寺別当道義によって建立され、道義は空海の実弟真雅の弟子である聖宝（832～909）を招き院主とした。その後、代々の院主は聖法の弟子の系統が務めたことからみても、三論宗の法統のみならず真言宗の法統が受けつがれていたことは確かである。さらに延久3年（1071）には東南院主が東大寺別当となることになり、華嚴宗はこれに対抗して、東大寺内に尊勝院を建立した。東南院には永観、珍海、敏覚という三論宗系の浄土願生者が排出した。とくに敏覚は珍海の面授口決の弟子であり、のちに明遍が敏覚に入門したことは、東大寺東南院－光明山寺－高野山とつづく、密教系、三論系の浄土教の伝統を伝えたといえる。

醍醐寺も同じ聖宝により貞観6年（874）に草庵が結ばれたのを始めとするが、醍醐寺座主が東大寺別当を務めることも多かった。

禅林寺は空海の弟子真紹により、仁寿3年（853）草創された。その後、永観が光明山寺より入寺するまでの220年間は真言宗として、永観以降は真言宗、三論宗、南都浄土教、静遍が入寺して以降は浄

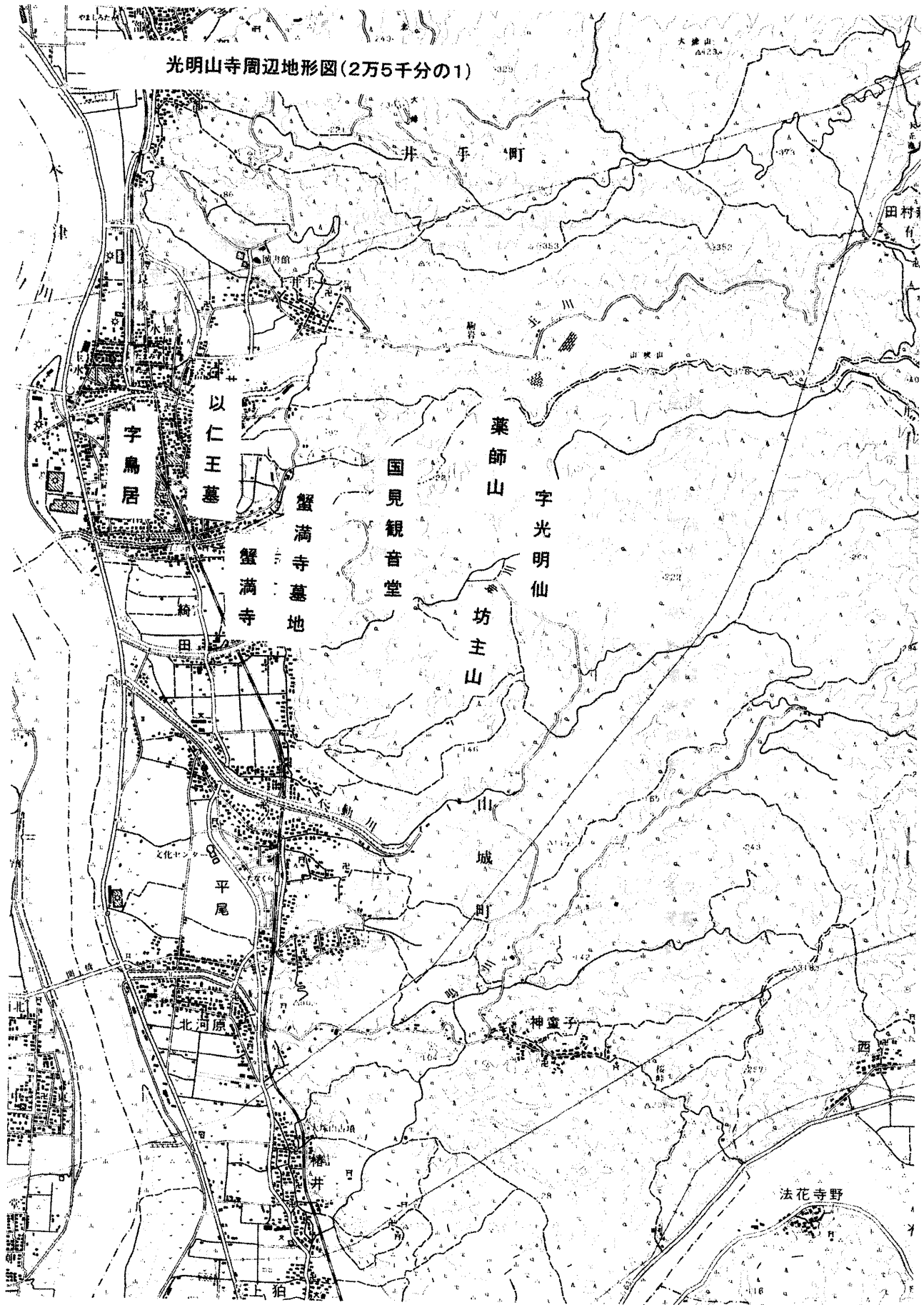
土系の寺院となった。

光明山寺は現在廃寺となり、史料も散逸してその詳細を知ることはできないが、発掘調査の結果、遁世地というよりも、参道が整備され、平安京から南都（平城京）への途次、東大寺への参詣者たちが立ち寄った場所。あるいは木津川の主要港である泉木津近くで何らかの役割を持った寺院であったことがうかがえる。

さらに、南都浄土教の流れを汲んだ浄土願生者たちが称えた念仏、とくに東大寺三論系や高野山密教系の念仏が交差する中心寺院として光明山寺は注目される。

註

- 1 寺名に「山」を含む寺院は、このほかに海住山寺、室生山寺などがあるが、いずれも役小角（えんのおづぬ）を開祖とする修験道、山岳仏教の流れを汲んだものと見られる。
- 2 『浄土宗全書』第16巻-775
- 3 大谷旭雄「心性罪副因縁集と永観の密教的名号観—とくに第七念仏項の影響から—」（『仏教論叢』第11号，昭和41年12月）
- 4 日本思想体系「往生伝・法華験記」（岩波出版）696～703
- 5 坂上雅翁「文殊菩薩と念仏—『大聖竹林寺記』を中心に—」（『浄土教の思想と歴史』山喜房仏書林，平成17年6月）
坂上雅翁「仏巖房聖心について」（『仏教論叢』第26号，昭和57年9月）



Abstract

When the relation between Komyosen-ji (光明山寺) and Koyasan (高野山) is discussed, well-known monks such as Kakuju (覚樹), Jippan (実範), Eikan (永観), Myohen (明遍) who moved from Komyosen-ji (光明山寺) to Koyasan (高野山) and then became a deciple of Honen (法然), and Johen (静遍) who moved to Koyasan Ojoin (高野山往生院) and became the XII of Zenrin-ji (禅林寺) are often cited. In this paper, the reconsideration of the functions and features that Komyosen-ji (光明山寺) have as a Nenbutsu-Bessho (念仏別所) of Todaiji (東大寺) was conducted based on the reports of currently conducted researches. Then, the relation among some schools of The Pure Land Buddhism in Nara (南都浄土教) . Middle age is discussed based on the relation among Koyasan (高野山), Daigo-ji (醍醐寺) and Zenrin-ji (禅林寺) and also referring to "Ichigyō-Ippitsu-Amidakyo" ("一行一筆阿弥陀経") which are preserved in the Isshinji (一心寺) and "Koyasan-Ojoden" ("高野山往生伝") .